

僕は今両親と3人で暮らしている。
僕にはかつて「可児 希来里」という妹がいた。兄であった僕は妹にやや特別な感情を抱いていた。何か少しでも困っていれば、僕は彼女を助けたい。妹を守りたい。その感情は行動で彼女にアピールしていた。
そんなある日のこと、僕は妹と二人で留守番をしていた。
日も傾いた頃、そんな我が家に来客が訪れた。妹が出てくるといって玄関の扉を開けたとき、郵便局員と名乗った男は彼女と目を合わせるやいなや手に持つ刃物で彼女を滅多刺しにしたのだ。彼女が放った断末魔が家中に響き渡り、明らかな異常を感じ取った僕は、急いで彼女の様子を見に行った。
玄関に着き僕が目にしたのは、夥しい量の血を流し倒れている妹と、血の付いた刃物を持ち、薄ら笑いを浮かべながら妹を刺し続けている一人の男であった。
男はそんな僕には一瞥もせず彼女を刺し続けている。
もうやめてくれ。ふざけるな…！

そこで僕の記憶は途絶える。

気が付くと男は跡形も無くなっており、無残な姿で倒れている妹と僕だけがそこにいた。
妹を守れなかった…。まもれなかった…。マモレナカッタ…。

しばらくして僕はUGNと言われる組織に保護されることになった。
僕はこの組織に所属し、すべての人を護る。大切な人を失ったときに受ける悲しみは計り知れない。その悲しみを知っている僕が同じ境遇に遭う人を生み出さないように…

それが僕の戦う「理由」である。